

9 月講演会の報告

縄文時代の再発見

～縄文の真実に迫る！ DNA 研究が描く新しい日本像～

9 月 14 日、ルナ・ホールにて、予備校講師 茂木誠（もぎまこと）氏による「縄文時代の再発見」と題した講演会が開催されました。

近年の考古学・自然科学・DNA 研究の進展によって、私たちが学校で学んできた縄文時代像は大きく書き換えられつつあります。従来は縄文＝狩猟採集、弥生＝農耕開始という単純な歴史観が主流でしたが、21 世紀以降の研究成果は、縄文文化が高度で多様な文明を形成していたことを示しています。



本講演では、この新しい縄文像が複数のテーマから紹介されました。講演の要旨は次のとおりです。参加者数は 126 名、担当は企画 G でした。

1. 縄文文化の始まりを塗り替えた世界最古級の土器

青森県・大平山元 I（おおだやまもといち）遺跡から出土した土器片は、付着した炭化物の放射性炭素年代測定により約 1 万 6500 年前と判明しました。これは氷河期の時代であり、世界最古級の土器です。この発見は、縄文文化が従来考えられていたよりはるかに早く始まり、世界の土器文化の起源の一つが日本列島であることを示しています。

土器は煮炊きに使用されており、当時の人々が単なる採集生活ではなく、調理技術を伴う高度な生活文化を営んでいたことが分かります。土器文化の起源が日本列島にある可能性は国際的にも大きな注目を集めています。

2. 土偶が語る縄文人の精神世界と造形力

長野県・八ヶ岳山麓の棚畑遺跡（たなばたけいせき）や中ッ原（なかっぱら）遺跡から出土した「縄文のビーナス」「仮面の女神」は、縄文文化の象徴的存在です。土偶は地域ごとに形が大きく異なり、古墳時代の埴輪のような定型化は見られず、一体一体が個性的で、造形そのものに強い意味が込められているように見えます。

多くの土偶は意図的に破壊されて埋められており、治癒や再生を祈る儀式だった可能性があります。中ッ原の女神では右足だけが粉碎され、破片が胴体内部に押し込まれていました。乳幼児死亡率が高い時代、母性や生命を象徴する女性像



縄文のビーナス

は集落の精神的支柱だったと考えられます。芸術家・岡本太郎が縄文造形に強い衝撃を受けたことはよく知られ、縄文美術は現代アートにも通じる自由な発想を持っているのです。

3. 三内丸山（さんないまるやま）遺跡が示す農耕・建築・交易ネットワーク

青森県・三内丸山遺跡は、最盛期に約500人が居住した大規模集落です。ここでの最大の発見は、出土した大量の栗のDNAがほぼ同一であることです。これは自然採集ではなく、優良な栗を選んで植えるという、人為的な選抜、植栽による農耕が行われていた証拠であり、『弥生から農耕』という従来の理解を根本から覆します。



さらに巨大な柱穴が多数見つかり、高さのある建造物が存在したと推測されます。大規模建築には共同作業を指揮するリーダーや社会的ルールが必要であり、縄文社会が高度な組織性を持っていたことを示します。また、三内丸山遺跡からは北海道産の黒曜石、新潟県糸魚川産の翡翠が出土しており、縄文人が丸木舟で海を渡り、広域の交易ネットワークを築いていたことが分かります。太陽や星の動きを読む航海術も備えていました。

4. 北海道に残る漆文化と家族の祈り

北海道の遺跡からは約9000年前の漆製品が発見されており、東アジアの漆文化の起源が日本列島にある可能性が高いと言えます。漆は装身具や土器に用いられ、縄文人の美意識と技術の高さを示しています。また、粘土板に赤ちゃんの足形を刻み、紐で首から下げていたとみられる遺物も多数見つかっています。成長祈願や追悼の意味があった可能性があり、家族の情愛と祈りが強く感じられます。

近年の研究では、縄文人の寿命は従来の「30歳程度」より長く、60歳以上の高齢者が多かった可能性も指摘されています。高齢者を共同体で支える文化は、他地域の「老人殺し」の風習と対照的です。

5. DNAが明らかにした縄文人のルーツと現代日本人への継承

北海道・礼文島の船泊遺跡の女性人骨から抽出されたDNAの分析によって、顔立ちだけでなく、皮膚や髪などの特徴についても復元が可能になりました。彫りが深く、二重まぶたや少しウェーブのかかった髪など、現代日本人と大きく変わらない容貌です。縄文人は東アジアの他の集団とは異なる、独自の系統を持っていたのです。



最新のゲノム解析では、現代日本人の遺伝的構成の約 10%が縄文系統であり、残りは弥生期以降の渡来人や古墳時代の人口移動による混血であることが分かっています。日本人は「縄文か渡来か」という二者択一ではなく、長い歴史の中で多様な人々が混ざり合って形成された存在なのです。

6. 鬼界（きかい）カルデラの大噴火と人々の移動

約 7300 年前、九州南方の鬼界カルデラで巨大噴火が起こり、西日本の縄文文化は壊滅的な打撃を受けました。火山灰によって森の恵みが失われ、それに依存していた人々は海岸へ移動して漁労に適応したり、東日本や朝鮮半島方面へ避難したりしました。その後、約 2000 年かけて西日本の自然が回復すると、今度は東日本や大陸側から人々が再び西日本へと戻ってきました。日本神話に登場する「高天原（たかまがはら）」からの降臨や、スサノオノミコトが朝鮮半島を経由して出雲へ渡る神話の物語は、この古代の過酷な大噴火と、日本列島を移動した「出戻り縄文人」たちの壮大な記憶を反映していると考えられます。

自然環境の変化に応じて人々の大移動や文化、人の交流があり、新しい生活様式を生み出したことは、縄文社会が動的で柔軟な文明だったことを示しており、日本神話を古代の人々の移動や交流の記憶として読み直す視点が求められています。天孫降臨や出雲への移動などの物語は、縄文～弥生期の人々の広域移動を反映している可能性があるからです。神話を歴史的事実とすることはできませんが、古代の人々がどこから来てどこへ移動したのかを考える手掛かりとなります。

7. 縄文的精神性と現代日本人の心

縄文社会は自然を支配するのではなく、自然と共に生きる文化を持っていました。弥生期の稲作社会が計画性・規律・共同作業を重視する「左脳型」文明であるのに対し、縄文的な生き方は直感・空間認識・柔軟性を重視する「右脳型」といえます。現代日本人の精神には、縄文的な自然観と弥生的な計画性の両方が受け継がれています。

縄文時代は、狩猟採集にとどまらず、農耕・交易・天体観測・芸術・精神文化などの高度な社会組織を備えた豊かな文明でした。DNA 研究は、縄文人が現代日本人の祖先の一部であることを示し、私たちのルーツを再考する契機となります。縄文人が残した遺跡・土器・土偶・DNA は、現代の私たちに「あなたたちは何者なのか」と問いかけています。





質疑応答

1. 縄文土器には多様な模様がありますが、記号や文字的なものはあるのでしょうか？

———文字のようなものはあったと考えられていますが、現時点ではまだ解読されていません。例えば、台湾の先住民の伝統的な刺繍には、どこ出身かを示す情報が込められているケースがあります。それと同様に、縄文の文様にも何らかの重要な情報や意味が込められていた可能性が高いと言えます。

2. 足が太かったりお腹が出ていたりする異形な土偶が多いですが、『古事記』の「ヒルコ伝説」のように、障害を持って生まれた子どもを神聖視するような文化的背景があったのでしょうか？

———インドのヒンドゥー教などでは、障害のある子どもが神として祀られる例が存在します。おそらく縄文時代でも、そうした子どもは単なる障害者としてではなく「特別な存在」「神の生まれ変わり」として扱われ、中にはシャーマン的な役割を担う者もいたのではないかと考えています。

『古事記』における「海に流された子（ヒルコ）」の記述も、古代人にとって特別な意味を持っていたはずです。岸边に流れ着いた異質なものを神として祀る習慣が、のちの恵比寿信仰などにも繋がっていきました。

3. 鬼界カルデラの大噴火や気候変動は、人々の移動や歴史にどう影響したのでしょうか。また、こうした最新の学説は学校の教科書に載るのでしょうか？

———約 7300 年前の鬼界カルデラ大噴火によって西日本の人口が一時的に減少した後、氷河期後の温暖化と寒冷化の波が訪れました。温暖化によって東北や北海道が住みやすくなり三内丸山などが栄えた一方、その後の寒冷化で再び移動が起こり、大陸からの渡来系と混ざり合うことで弥生文化が形成されました。

新しい学説が学校の教科書に採用されるまでには 10 年ほどかかるため、一般化するにはまだ時間がかかります。また、受験業界は入試に出る内容しか扱わないため、こうした最新研究が授業で取り上げられにくい現状があります。だからこそ、講演会や YouTube などの場を通じて伝えています。

4. これまでの歴史では「東日本には何もなかった」と教わってきましたが、それは大和国家中心の視点だからでしょうか？

———おっしゃる通り、大和国家が自らの起源を西日本に置きたかった背景があります。西側に移動して稲作文化に染まった人々は、自らの元々の記憶を上書きし、東日本で狩猟採集を続ける人々を「異民族」と誤認してしまいました。しかし、血統的な繋がりと、文化的な移行は別の問題です。日本神話における天津神（高天原）と国津神（出雲）

の対立は、まさに縄文的な森の自然観と弥生的な稲作農耕観の文化的対立を象徴していると言えます。

5. 日本信仰の多様性とヒルコと七福神など文化の融合について

———日本文化の大きな特色は、異なる文化や信仰の融合にあります。例えば、流れてきた異形なものを祀る信仰から生まれた恵比寿信仰に対し、仏教やヒンドゥー教、中国の道教などが混ざり合って七福神が形成されました。インドのマハカーラ（大黒天）が、日本の大国主命の名前や「大国」の読みの共通性から合体したのがその一例です。

6. 近年の AI の急速な進化は、人類にとって新たな進化か、それとも危険な脅威なのでしょうか？

———私自身、YouTube の動画編集や原稿の校正などで AI を非常に便利に使っており、優秀な秘書が 2~3 人いるような感覚でポジティブに活用しています。一方で、AI には開発、利用する人間の思想がそのまま反映されるため、使い方を誤れば危険性も孕んでいます。人類の滅亡につながるか新たな進化になるかは「100%信用せず、個人情報を安易に渡さず、必要な質問だけを投げる」といったように、AI を賢く見極めて主体的に使いこなす姿勢が重要です。

（広報 G 兵東 勇）

